

闇の話

川崎ゆきお

「ややこしいものは地下にある」

「はい」

「天にあると丸見えだ」

「はい」

「隠しておきたいものは地下にある。まあ、見えないところにあると言ってもいい」

「アンダーグラウンドですね」

「暗倉、アングラだな」

「はい」

「地下世界、洞窟、ダンジョン、古墳でもいい。墓地でもいい。地下は闇の国。しかし、地球空洞説で、地底人がいるわけじゃないが」

「地底人对最低人というのがありました」

「何だね、それは」

「漫画です」

「漫画や落書きもアンダーだね。見えないところに落書きをする。見えるところに画くやつもいるがね。やはり建物の裏とか、人の目に触れにくい場所とかだ。これは言ってはいけないこと。使ってはいけない言葉や、表には出せないポンチ絵などもあるだろうねえ」

「闇の世界ですねえ」

「陽が当たらない、だからアンダーグラウンド」

「しかし、闇にも最近光が当たり出して、表に出て来ることもありますねえ」

「その瞬間、闇世界ではなくなる。そこに闇があること自体が分からぬような闇が本物の闇で、闇であることが気付かないようなのがよろしい」

「はい」

「光があれば影がある。物陰もある。ここは闇ほどに暗くはないが、それに近い。縁の下の力持ちも、座敷にはおらん。下だ。床下だ。見えない。そんな人が縁の下で腰を落とし、家を両腕で支えているとすれば怖いだろうがね」

「はい」

「そのため、神秘は地下にある」

「しかし、発掘などで、地面を掘り返すでしょ」

「滅多にそんなことはしないさ。何かの工事で掘り返したところに、何かが出て来たので、あとは丁寧に掘り起こすだけだろう。あの岡が怪しいと思っても、勝手に掘り出せないからね」

「そうですねえ。盗掘になりますねえ」

「天然物の宝物も地下に眠っていたりする」

「鉱山ですね」

「人も一日一度は闇の世界に入る」

「睡眠ですね」

「常に闇と接しておる。毎日だ。しかし寝ているので、気付かない。闇の中にいても闇だと気付かない。寝ているから当然だな。ただ、闇の中で夢を見る。これも不思議な話だ。見ない人もいるが、覚えていないんだろう。犬も猫も夢を見る」

「魚は」

「あれは泳ぎながら寝ている。泳ぎ続けないと死ぬ魚もいるしな」

「虫は」

「さあ、やはりじっとしているところを見ると、寝ているんだろう。死んだふりをする虫もいる。冬眠する虫もいるな」

「それで、何のお話しでした」

「忘れた」

「そろそろ闇の入り口がお近いのでは」

「そうかもしれん。年寄りには睡眠時間が短い。それが長くなり出すと、闇が近いのだろうねえ」

「はい」

了